

井上康・崎山政毅『マルクスと商品語』(社会評論社、2017年)をめぐって

崎山政毅

- ① 榎原均は「価値が、むしろ、あらゆる労働生産物を社会的な象形文字にすっかり転化させるのである」というマルクスの叙述を根拠として、商品語を「社会的な象形文字」と述べている。だが、この箇所は、商品物神性についての叙述に含まれており、商品語としてこの叙述を受け取るには、「商品語」概念が登場する第二版以降の第一章第三節 A 第二項(簡単な価値形態の「相対的価値形態」)と商品物神性を解いた同章第四節との強うい連関にほかならない「結合性」を示さなければならない。
- ② 当該箇所は初版にはないが、第二版以降のドイツ語版では同一文章で存在する。

Der Werth verwandelt vielmehr jedes Arbeitsprodukt in eine gesellschaftliche Hieroglyphe.

(MEGA II/6, S. 105.; II/10, S. 73.)

フランス語版では以下のように「社会的」が除かれている。

Elle fait bien plutôt de chaque produit du travail un hiéroglyphe. (MEGA II/7, S. 55.)

ちなみにエンゲルス監修ムーア/エイヴリング訳英語版では下記のとおり。

It is value, rather, that converts every product into a social hieroglyphic. (MEGA II/9, S. 64.)

象形文字と訳されている原語「ヒエログリフ」は、単数の不定冠詞を伴っており、それが定冠詞付きの「商品語」における **Sprache (die Waarensprache)** に充たるとするには、無理がある。

マルクス存命中にロゼッタストーンは英国博物館に保存されて研究された。だが、ヒエログリフが子音を補う形で発音する表音文字と確定されたのは、アラン・ガーディナーの研究成果であり、それが公刊されたのは1920年代になってのことである。つまり、マルクス存命中はヒエログリフは音韻が未解明の表意文字(ちなみに漢字は表語文字)でしかなく、しょう h しょうひ商品語に用いられる **sagen** ではなく、**lesen** に相当するものだった。そのことは、上記の一文に続いて、「その後になって、人々は、この象形文字の意味を解こうとして…」と書かれていることから瞭然たるものがある。

『マルクスと商品語』は、確かに、資本主義の廃絶を目指す協働の一環足らしめたい、との強い思いを基礎に置いている。だがしかし、そのことは、同書がそのままにして革命的实践のマニュアル足りうることと隔絶している、とわれわれは考えている。むしろ、まったく新たな「組織性(党?)」、「政治」、「実践」を見出す際の手助けであれば、実に幸いとわれわれは考えている。

●価値について(現在、「補論」の「その2」として執筆準備中)

新MEGAの第二部(『資本論』とその準備労作)は、1857-1858年草稿(いわゆる『経済学批判要綱』)をも含めているが、内容を熟読すれば、『要綱』とそれ以降の著述に大き

な差異が存在することが明らかである。1859年に第一分冊のみ刊行された『経済学批判』、1861年からの『経済学批判』、その他の草稿とマルクス存命中の『資本論』各版には、「価値とは…である」という肯定的・能動的命題は見出せない。社会（この場合、資本主義的生産様式が支配的な諸社会のいずれか、あるいはそのすべて）の中に産出されるあらゆる労働生産物が価値としての商品となる様態を根底的に批判することが、『資本論』の目的であったのであり、学術書として屹立する一冊であることは、チャールズ・ダーウィンの日記での評価からも理解するに容易である。

要するに、価値批判こそが眼目であって、資本主義的生産様式が支配的な社会の力と構造の《外部》にある（べき）価値については、マルクスは語っていない。冒頭商品論を研究対象とする、われわれの共著もまた、それと同様である。「ほんとうの、自由の国 *das wahre Reich der Freiheit*」と第三部第48章のIIIで述べられた世界を創出した後には、人間の生そのものが価値となり得ることを、著者の一人である本日の報告者は夢見るが…。

●榎原『情況』論文（2018年冬号、pp. 200-214.）での「第三章」の「③金融化論の批判」について

榎原は、「実体経済と架空経済との対比から、後者が経済を支配しているという認識である。この見解は架空経済の内容についての解明がなされていない」（pp. 213-214.）という断定で終わっている。だが、宮崎義一『複合不況』（中公新書、1992年）の第1章および第4章で、すでに金融化の実体経済への優越と支配が実証的に述べられている。ちなみにわれわれの共著では、現実資本と架空資本という概念によって、宮崎が警告を発した事態の次元を超出して、まったく新しい架空資本の運動がグローバルな支配権力を構成する核となったよ述べた。これは、新たなトランスリージョン的なブルジョアジーの登場（例えば、笹田千容『MBAたちの中米変革』（風響社、2014年）；平野克己『経済大陸アフリカ』（中公新書、2013年）、Kedar, Claudia, *The International Monetary Fund and Latin America: The Argentine Puzzle in Context*, Philadelphia, PA., Temple University Press, 2012. を見よ）や、世界銀行グループが2016年末に刊行したイスラーム金融のしよで諸データをくわ詳しくぶんせき分析しているグローバル・レポート（World Bank Group (Islamic Development Bank Group), *Global Report on Islamic Finance, 2016*, Jeddah, Kingdom of Saudi Arabia, 2016.）などからは、劇的な金融化の問題が浮き彫りにされている。

●「負債経済」について

榎原『情況』論文は、デイヴィッド・グレーバーの『負債論』（Greaber, David, *Debt: The First 5,000 years*, updated and expanded edition, Brooklyn, NY., MelvilleHouse Publishing, 2014.）に言及した後に、「負債経済」なる概念をてい k 提起している。グレーバーの『負債論』には（2014年増補改訂版の原書を読む限りでは）、おそらくは *Debt Economy* あるいは造語で *Debtonomy* というような語は見当たらない。この「負債経済」とは、一体いかなるも

のなのか？

ちなみに、ネオリベラリズム以降のアメリカ人類学では Anthropology of Money なる領域が登場し、いわゆる primitive money あるいは savage money を扱う論文が雨後の筍のごとく量産された。グレーバーの著作もその流れに位置付けられうるものであり、彼独特の「人類学的」視座から現状を論じている同書の内容については、生産的な批判が必要であろう。